



矢代先生夫妻と石澤館長(右)

昨秋11月、大和文華館が開館10周年を迎えたことは、すでに読者の皆様もご存じのことと思いますが、それを機会に矢代幸雄先生は館長職を引退され、不肖私が先生のあとをお引き承けすることになりました。

更めて申し上げるまでもないかも知れませんが、矢代先生は大和文華館とは切っても切れぬ密接な関係のある方であり、先生は単に大和文華館の創立に関与された人々の中のおひとりであるというのではなく、大和文華館の基本的構想の生みの親というべき方であり、詳しいことは昨秋の開館10周年記念として発刊した「大和文華館10年のあゆみ」に述べてありますので、ここでは重複を避けますが、極く簡単に言いますと、大和文華館は近鉄の前々社長の故種田虎雄氏の発想と提唱にそもその端を発し、その種田氏を始めとする近鉄主脳部の人々から100パーセントの信託を受けた矢代先生が、先生のユニークな構想に基いて種田発想に美事な肉付けをして出来あがったものが、今日の大和文華館の姿であると申してよろしいかと思います。

矢代先生は去る11月3日の文化の日には文化功労者という輝かしい顕彰に浴され、11月5日には満80才の誕生日を迎えられました。館長を引退されるのに先立って誠に申分のない立派な花道の設けられたことは、私共にとってもご同慶の至りでありました。しかしなんと申しても先生が第一線を退かれたことは、私共残された館員一同にとってはいうまでもなく、友の会の会員の皆様方にとっても大きなショックであることはご同様と存じます。

ここで少しふり返って見ますと、財団法人大和文華館として戦後早々の昭和21年に発足してからはもうやがて4半世紀を経過し、その間に先生独自の審美眼によって鋭意収集された美術品の数も相当の量に達したところで、折よく近鉄が開業50周年を迎えるに当たり、その記念事業の一つとして大和文華館は建設され、そして一般に公開されてから満10年余りを経過したことになります。その間に大和文華館は矢代構想によるユニークな美術館としての性格も形作られ、それに対する識者の認識と評価もまた自然に定まってきたと申せましょう。よく海外からの来訪者から「大和文華館は全く素晴らしい美術館だ。まるで珠玉(ジュム)だ、宝石(ジュウェルリ)だ。世界中で、こんな美しい美術館はどこにもな

矢代幸雄先生と私(その1)

大和文華館館長 石澤正男

いよ。」といった讃辞を聞かされるのですが、それは決して単なる外交辞令だけではないようです。海外の人々からも、そこまで認められるようになったことは、全く矢代先生の残された功績であります。とにかく大和文華館の性格なり、その歩むべき軌道といったものが、これまでにしっかりと基礎付けられてきたことは、あとを引き継ぐ私にとっては何によりも心強い指標が与えられていることでありまして、私としては、これまでの歩みの方向に従って、更に一步でも意義ある前進が出来るようにとお願いいたしております。

矢代先生は第一線からは引退されましたが、現在も財団の理事のおひとりとして館の事業にはこれまでと同様に深い、そして温い関心を寄せて下さいます。この頃は神奈川県大磯町の梅かおる閑静なご自宅で、至ってお元気に悠々自適の日々を楽しんでおられることを、この機会に会員の皆様にご報告いたしておきます。

この号では館長の更迭と新館長の自己紹介をしてくれというのが、編集担当者の注文ですが、矢代先生のような偉い世界的な学者のあとを柄にもなく引受けることになった私にとっては、これは甚だ苦しい注文で辟易せざるをえないのですが、しかし考え直してみると、この「美のたより」は、一方交通ながら、大和文華館と友の会の会員の皆様とを結ぶ唯一の大事な脈絡ともいえるべき出版物である以上、出来るだけ親しみのある、いわば温い血の通ったものにしてゆきたいというのが、われわれの一貫した方針なのですから、この紙上を通じて会員の皆様とのお馴染みを少しでも深めるよすがとして、面映ゆいのはやまやまですが、道標のようなお話を、自己紹介にかえさせていただきますことにしました。

私が大和文華館の仕事に携わるようになってから早いもので、もうやがてこの4月で満7年になります。その間私は奈良に住み、毎月一週間位奈良へ来てわれわれを指導して下さいる矢代館長のお仕事を次長としてお手伝いしてまいりました。しかし矢代先生との結びつきは非常に古く、考えてみると、それは私が東京大学の美術史学科を卒業した昭和3年の春にまで遡ることになりますので、これもやがて満43年になるところです。全く古く長い間の知遇と申せましょう。

私が東大を出た頃は不況のドン底で就職難の絶頂とってよかった時代でした。まして美術史で職にありつくなぞということは誰れも予期できないことでした。その頃の日本には帝室博物館こそありましたが、まだ名実ともに美術館といえるほどのものは一つもありませんでした。一方美術史を専攻しようとする学生も極く少数で、あっても殆んどが金持の子弟で、卒業後の就職なぞは問題外といった連中でした。私のような貧乏書生は全く例外でした。それだけに卒業後の生活には一方ならぬ苦勞をせざるをえなかったのです。そんな時に全く思いもかけぬ夢のような吉報が私にもたらされてきました。(以下次号)

季刊 美のたより No.16

昭和46年3月1日

発行 大和文華館